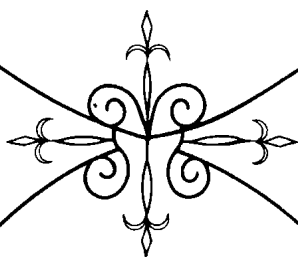




三島由紀夫全集



28

IV

監修／石川淳 川端康成 中村光夫 武田泰淳
編集／佐伯彰一 ドナルド・キーン 村松剛 田中美代子

新 潮 社

本文印刷 株式会社精興社

口絵印刷 松本精喜堂印刷株式会社

付録印刷 株式会社精興社

口絵製版 株式会社学術写真製版所

製本 大口製本印刷株式会社

製函 日本紙バルブ商事株式会社

本文用紙 特漉上質紙・三菱製紙株式会社

皮革 靱井皮革株式会社

表紙用紙 手漉局紙キラ引・株式会社山田商会

扉用紙 ゴールデンアロー・特種製紙株式会社

見返用紙 しぶ茶堅紙・特種製紙株式会社

函用紙 Sペラン絹目・特種製紙株式会社

乱丁・落丁本は、御面倒ですが小社通信係宛御送付
ください。送料小社負担にてお取替えます

三島由紀夫全集 第二十八卷 目次

心中論	セ	「女優志願」をめぐる	三六四
カブキ・新劇・アメリカ演劇	一六	作家と結婚	三三八
裸體と衣裳——日記	一九	「薔薇と海賊」について	三七八
外遊日記	一八三	三谷君の寫眞によせて	三八〇
近松ばやり私觀	二〇四	にはか編集者の文學熱	三八一
旅の繪本	二〇九	武田泰淳氏の「媒酌人は歸らない」につ	
ニューヨークの溜息	三二	いて	三六四
ニューヨークぶらつ記	三六	同人雜記（「聲」）	三六六
ディーンとブロードウェイ	三四〇	大岡昇平著「作家の日記」——書評	三九四
紐育レストラン案内	三六〇	月に祈る	三九七
日光浴	三五五	知友交歡	三九九
あとがき（「薔薇と海賊」）	三六六	蝶の理論	四〇二
「花ざかりの森」出版のころ	三六八	作者の言葉（「むすめ帯取池」）	四〇五
「アルマンス」について	三六〇	人間理性と惡——マルキ・ド・サド著	
中村八大氏	三六三	澁澤龍彦譯「悲慘物語」	四〇七

芥川比呂志の「マクベス」	四〇九
無題（ むすめ 「ごのみ」帯取池）注記）	四二三
文章讀本	四二四
H・マルクーゼ「エロスの文明」	五五五
世界の靜かな中心であれ	五七一
内輪のたのしみ	五七三

わが非文學的生活	五七六
見事な若武者（矢尾板・ペレス戰觀戰記）	五八一
解題	五八五
校訂	五八六

三島由紀夫全集 第二十八卷 評論 (4)

心中論

一

舊臘ニューヨークで映画「サヨナラ」を見たとき、そのなかに人形淨瑠璃の多分「曾根崎心中」の心中の場が出てきて、生身を裂かれようとしてゐるG Iと日本娘の夫婦が涙を流し、つひに自分たち自身も心中するといふシーンがあるのを見て、G Iと日本娘の心中といふ事件は、事實再三あつた話ではあるが、日本の若い世代がドライ一途になつてゆくとき、アメリカの映画製作者は古いウェットな日本にぞつこん參つてゐると思つて、苦笑を禁じ得なかつた。ところが數日後、愛親覺羅嬢の心中事件がアメリカにも傳はり、若いアメリカ人たちがその事件をしきりにロマンチックがつてゐるのを見たり聞いたりして、あいた口がふさがらないでゐるところへ、日本へかへつてみると、またもや學習院の學生の心中事件が起つてをり、わが母校はいつのまにか心中大學と呼ばれる始末になつてゐた。

しかし、何と云つても若い人同士の心中はいいもので、太宰治などの中年者の心中の不潔さはない。自殺でも心中でも若いうちに限るので、それが美男美女なら一そう結構なのである。おんなじハラキリでも、乃木大將の皺腹より、白虎隊のほうがどんなにきれいかもしれない。

或る人は私のかういふ放言に眉をひそめるだらうが、私は今、故意に放言をしたのである。日本人の誰の心の中にも道德を超越して、右のやうな美意識が眠つてゐる。日本人には古代ローマ人のやうな殘虐趣味は少く、淡白をもつて鳴つてゐるけれども、かういふ美意識の包含する内容は廣汎で、そこにはたしかにゾツとするほど殘酷で冷酷な嗜好があるのだが、それが涙と同情と懂れの糖衣ですつかり覆はれてゐるのである。

美しい人は夭折すべきであり、客觀的に見て美しいのは若年に限られてゐるのだから、人間はもし老醜と自然死を待つ覺悟がなければ、できる限り早く死ぬべきなのである。平均壽命の延長のおかげで、他の遊星から地球を眺めたら、地球の表面は年毎に醜くなつてゆきつつあるだらう。「人生で最も善いことは、生れて來なかつたといふことであり、次に善いことは、できるだけ早く死ぬといふことである」とミダス王は森で會つたサテュロスから告げられた。

さて、人間の肉體の可視的な美は、せいぜい二十代で終つてしまつて、あとは凋落の一途を辿るだけであるから、それからの人間は仕事や知恵や精神に携はらなければならぬ。精神の營みの未成熟な若い人の上に起る死は、病死であれ自殺であれ、結局肉體が減るだけのことである。精神や知性の聲がそこで途絶えるといふのではなく、若い美しい肉體が急に音を立てなくなつて、動かなくなつて、腐朽するといふだけのことである。青年の死はかくて、どんなに哲學的な遺書を殘さうとも、要するに一箇の肉體的事件なのである。青年が精神的と考へるあらゆる問題が、より深い意味では、純粹に肉體的な問題にすぎぬといふ考へは、私が自分の青年時代を経て到達した頑固な確信であつて、昨今の心中事件を見ても、この確信を變へることはできない。

しかし、私は若い人を蔑するのではない。年を重ねるとともに、人は純粹な肉體上の死が不可能になる。さうなつてからの自殺や心中を醜い、と私は言ふのである。

私は若い人の心中を美しいとする日本人特有の偏奇な美意識から出發して、いつのまにか、若い人の心中に一種の精神の勝利を見ようとする日本人に共通な感覺と背馳してしまつてゐる。事實、私はかれらの心中に、精神の勝利などといふものをみぢんも感ずることができない。精神といふものは頑固に生き永らへ、頑固に老い、頑固に形成しようと志向するものであつて、それだからこそ精神は、人間の永い歴史に互つて、頑固に「生命の代理」をつとめて來たのである。青春時代をすぎて、生命がその眞の活力と魅力を失つた時になつて、あたかも別の生命が動き出したやうに、精神が生命の働きを模倣しつつ働き出し、生命を凌駕するまでに至るのである。これを知つてゐたギリシヤ人は、人間精神のあらゆる形態を、青年の肉體の彫像で象徴し永遠化しようと考へて、それに成功した。

話は横道に外れるが、動物には精神といふものがない。人間だけにそれがあるのは、人間が徐徐に自然を征服して、殊に男が、交接と繁殖ののちに殘された空しい役割に飄然と目ざめ（女にはそのあとに育児といふ仕事が残つてゐる）、死にいたるどうしやうもない閑暇を埋めるために、精神を發明したのであらう。精神といふものは、多分、起源的には男性の専有物であり、男性の武器であつたが、その武器によつてまた自ら傷つけられて、精神が孤立して、女性の領分である大地から絶縁される憂目にも會つたのであつた。

……さて、私が心中を單に肉體的事件だと云つたのは、低い官能的な意味で云つたのではない。私は、それが精神上の事件ではなく、女性的な情感的な世界の出來事だといふことも、籠めて云つたつもりである。ところで、日本では男ですら、大部分がかうした女性的情感のな世界に好んで住んでゐるのである。浪花節やヤクザの勇ましさは、實は極度に女性的情感のなものである。一方、藝術といふものは、半ば男性的半ば女性的なものであつて、といふよりは、一般の平均水準から云ふと、百パーセント男性的なものに、百パーセント女性的なものを混淆して出來上つてゐるので、純粹に精神と知性だけの制作にかかはるものではない。藝術は、日本では、殊に、女性的、情感的、肉體的、官能的なものへの嗜好を充たすやうに要請されてゐる。それが心中といふやうなティピカルなその表現を見のがすわけがない。かくて近松の有名な心中物の傑作が生れ、もてはやされて來たのであるが、そこでは常に、男性の理念が、女性の情念に屈服し敗北する、同じ主題が語られてゐる。男の側のエクスキューズとしての「意氣地」などといふものは、取るに足らぬものである。

「よそのつつねも我が命も一よぎりなる憂ふしや、

憂身の果は主親のばちにかかりし三味線の二十二三の絲きれて残る一期も暫しぞや、
いかに今年のかから露も哀れ袂のさみだれに、心は今も皐月闇木の下闇にとまぐれて、
覺えし道も幾たびか同じ所にまひ戻る。(中略)

仇の誓の朝顔も今咲きかかる花の露、

それより先に凋む身は明日の朝日に此體、干さん曝さん淺ましと縋る涙の龍骨車にあるの水さへまかすらん、

世の中に絶えて心中なかりせば、
二世の頼みもなからまし……」

〔近松門左衛門『平兵衛小かん夜の朝顔』『心中刃は氷の朔日』〕

三

大人の心中では、必ず心中の直前に性の営みが行はれるさうであるが、近松の心中物の道行の文章はつねにこれを暗示してゐる。文辭の上ではそれに類した文句はないけれど、あの永い道行の美文は、死の直前の性的陶醉そのままである。

しかし、愛親覺羅嬢の心中事件に際してはさういふことがなかつたと云はれ、二人が純潔を保つて死んだといふやうに喧傳され、一そう世人の同情を呼んだのである。どうせ死ぬのなら純潔だらうがなからうが同じことぢやないかと考へるのは大人の考へで、純潔を保つて心中するのは英雄烈女の行爲のやうに禮讃されてゐるのであるが、もう一步進めて、死がかれらの性の営みに相當し、それを代理したといふ風にも云へはすまいか。心中といふ言葉にはどうしても性的陶醉の極致といふ幻影がつきまとふので、男女の性行爲は本質的に疑似心中的要素を持つてゐる。これは少くとも性的經驗のある人間なら誰でも知つてゐる祕密である。

私は、一家心中といふやうな、外國には見られぬ日本特産の心中などについてはわざと觸れず、さして生活的にも追ひつめられてゐない若い男女の、昨今の心中の事例に問題を限定したいのだが、實際のところ、人間を自殺に追ひ込む諸因子の究明はむだごとにすぎない。新聞の讀者はいつても或る行爲の簡單明瞭な理由を知りたがるので、かつまたそれを知つた氣になれば一應満足す

るので、新聞は必ず自殺の理由を附記するのが建前になつてゐる。

曰く「失戀のため」「神經衰弱のため」「親の許しが得られなかつたため」「生活苦のため」云々。そしてあらゆる人間行爲のあいまいさと「理由を峻拒する性質」とを知つてゐる者の目には、これらは空しい文字と映るはずだが、世間の大多數は人間行爲の理由づけといふ假説によつて満足し、他人の不可解な危険な行爲を整理し得たといふ安心感を獲得し、それぞれの凡庸な幸福を守るために協力する。のみならず多くの凡庸な行爲者自身も、他人によつて自分の行爲を解説され、名をつけられ、整理されることを喜んでゐるのである。

さて、ロムブロゾ以来、天才に狂的素因のひそんでゐることは定説になつてゐるが、「逆もまた真なり」と云へないことも、これまた定説になつてゐる。精神病院の患者がみんな天才であるといふわけには行かず、狂人の狂想と見えるものも、凡庸な社會通念の或る誇張にすぎない場合が通例である。自殺や心中の理由づけもまたこの例に洩れない。今ここに一人の青年がゐて、失戀をし、神經衰弱であり、生活苦のどん底にあつたとしても、彼は自殺するとは限らないのである。戦後の青年犯罪の増加や、このごろの心中の増加に對して、すぐさま社會學的考察の引っぱり出されるのが流行になつてゐるけれど、あらゆる社會學的考察は、畢竟、右に述べたやうな「理由づけ」の體系化であつて、最後のところは何も語らない。

四

肉體といふものが本質的に滅亡の論理をもち、精神がその對蹠物として据ゑられて、永遠への志向をもつといふことは、キリスト教や佛教を問はず、あらゆる宗教の前提であつた。

日本人にはかういふ宗教的情操に加ふるに、一種の美的な思考があつて、肉體の持つてゐる滅亡の論理そのものを美化して、崇敬の對象にしようとする傾きがある。日本人の自殺讃美には、かくて、人間意志の悲劇といふものが缺けてゐて、自殺や心中といふ人間意志の行爲そのものさへ、實にあいまいな形態を帯びるのである。

たとへ自殺や心中をしなくつても、自己破壊が青春の本質的衝動なのであるが、それは青春なるものが「肉體的狀態」であるといふことをしか意味しない。かうした肉體的狀態に突如として「永遠」を繼木^{つぎ}して、自分たちの清純な戀愛の永遠性を保證しようといふのは、思へば無暴な論理であるが、こんな無暴な論理からしか、心中の美しさが生れないことも事實なのである。若い人の清純な心中が、忽ち傳説として流布され、「戀愛の永遠性」や「精神の勝利」の證左にされるのは、少くともこのやうな架空の幻影のために彼らが生命を賭したといふ誠實さの證據にはなる。といふのは、「戀愛の永遠性」や「精神の勝利」なるものは、生きてゐようが、自殺してみようが、心中してみようが、青春といふ肉體的狀態にとつては不可能な文字なのであつて、青春のあらゆる特質と矛盾する性質のものであるから、それゆゑに、さういふものは美しいのである。精神や永遠に身自ら近づきかけてゐる年齢の人たちの心中が醜くて不潔に思はれるのは、正にこれらの内部にこそ、生きながら、精神や永遠性への志向が、期待されてゐるからなのである。かういふ點では、私は、世間の成人たちが若い人たちに對して抱いてゐる甘つたるい幻影に全く與しない。

ところで心中の美しさといふものも、全く幻影的なものである。文樂の人形で見たつて「知死^{ちし}期^き」の苦悶はいいかげんグロテスクな見物^{みぶつ}であるが、人間の死にざまがそんなに美しからうはず

がない。しかし、常人たちは陶醉と幻影をたよりにして死に、世間の人も幻影をしか見ないのであるから、警官や醫師やその場の立會人の見た心中現場は、忽ち人間の記憶の中へ埋没してしまつて、どうでもよくなつてしまふのであるらしい。

大體心中や自殺が人里離れた場所を選ぶのは、死をできる限り「主觀的な」事件にしたいといふ欲望からであらう。他人の目はその死を客體に化してしまふ。戀人の目だつて、他人の目にはちがひないのであるが、心中が自殺とちがふ點は、やはりお互ひがお互ひの死を眺め、主觀的な死と客觀的な死を同時に味はひ得るといふ點にあらう。いや、一人きりの自殺ですら、ある人々はビルの屋上から人通りの多い路上に身を投げて、自分にとつては全く主觀的な死を、すぐさま客體化したいといふ熱烈な野望に燃えてゐる。

人里離れた場所での死へ急ぐとき、多分戀人同士には、一種の契約が出来上つてゐて、お互ひの死を保障し、死に損なひを避けようとし、無形の委任狀を手交することになるのであらう。これは本當は一人で死ぬよりも確實性のうすい死に方なのであるが、實は單獨自殺の數學的確實性をおそれる氣持が、心中といふ想念をはぐくむのだともいへる。死を純粹に主觀的な事件として追究することの恐怖が、相對死あひたいじといふ形式を生み出したのだともいへる。死を決行しようとするとき、孤獨の本源的な意味に觸れて、死のみならず生そのものも完全に孤獨であるといふ結論に到達するには、ある弱さがその妨げをなし、心中といふ形に落着くこともあらう。そこには何か人間意志にとつての不純さがある。あらゆる形の自殺に、演技の意識が伴ふことを、心理學者はよく知つてゐるが、私には自殺といふ行爲は、他のあらゆる人間行爲と同様、あらはな、あるひは秘められた不純な動機を手がかりにして、はじめて可能になるもののだと思はれる。純粹自殺と